

## 一般高齢者における嚥下機能の評価と口内環境との関連について

小林 由佳

高齢化率が上昇を続けている我が国での死因は第5位が肺炎、第7位が誤嚥性肺炎となっており、これらの症状の悪化には誤嚥が関係していると報告されている。このことから、嚥下障害を予防、早期発見することが重要であると考えられる。

そこで本研究は、N県内在住65歳以上の介護認定を受けていない一般高齢者15名を対象に、嚥下スクリーニング法のEAT-10、RSST、MWSTを行い口内環境、口腔機能との関連を調べた。

その結果、EAT-10は咀嚼機能の評価の舌圧測定とオーラルディアドコキネシスに有意差がみられた。舌は咀嚼の際に固有口腔に落ちた食物を再び歯列上に戻し、咀嚼効率を上げるのに有効に働く。また、舌が挙上し、硬口蓋を前方から後方に圧することにより食塊を舌後部に送り込む。そして舌根部が下がり、舌圧で食塊は口腔から咽頭部に移送されるメカニズムである。そのため、舌圧と摂食嚥下機能には関連があると考えられる。機能評価での「パ音」は、口唇運動に用いられている。このことから、食事をする際の口唇閉鎖は重要であると

考えられる。次に「タ音」は、舌前方の運動機能評価に用いられている。舌尖の動きが低下していると、上手に食塊を咽頭に送り込むことができないため舌尖の働きは重要であると考えられる。また、「カ音」は舌後方の運動機能評価に用いられている。飲み込む際には、奥舌の機能が重要であるため、「カ音」の評価が低下していると、飲み込みに問題が生じると考えられる。RSSTによる結果では、それぞれの評価において有意差は見られなかった。この結果より、一般高齢者ではRSSTにより嚥下障害のリスクありと評価されても、口内環境、咀嚼機能、嚥下障害の自覚症状のなかのどの衰えかを知ることが難しいことが伺える。MWSTは、嚥下障害のリスクありと評価された人は1人であったことから、嚥下障害が衰えている対象者に行うことが効果的であると考えられる。

本研究から、一般高齢者における嚥下機能の評価と口内環境との関連について明らかな結果を得ることができた。今後の歯科保健指導や歯科介護に役立てていきたい。